「白いぼうし」の語りと主題

上越教育大学教職大学院　松　本　　修

0　はじめに

「白いぼうし」の学習において、学習者から次のような読みが出された。*1

122 ＹＯ　さっき：あの、いろんな人が言ったように、たてもの、四角い建物ばかりだもんっていうところで、えっと、たぶん、あの：人間からもしにん、ちょうじゃなかったら：そのたぶん山にはそのまま入れないと思うし、あの一番最初のページの六月の初めで、夏がいきなりはじまったというようなときに、たぶんもう暖かいと思うから、そこからちょっとはいって、で、松井さんがあの：外に出ているときに：もぐりこんだから、多分こうやった。

ＹＯは「ちょうは道に迷っていて男の子につかまってぼうしに入れられてしまった。タクシー運転手の松井さんに偶然助けられたが、ここがどこだかわからない。暑いためタクシーの窓が開いていてそこから入って人間の姿になってみんなのところに戻ろうとした。タクシーで菜の花横町まで連れていってもらい、ちょうの姿になってみんなのところに帰った。」というような読みをしていると思われる。ＹＯは、作中人物「ちょう」・「女の子」の物語としてこの物語を読んでいる。

また、同じ授業における「不思議に感じた部分に線を引いて書き込みをする」という活動で、ＭＡは、「おかっぱのかわいい女の子がちょこんと後ろのシートにすわっています。」「ミラーにはだれもうつっていません。振り返ってもだれもいません。」という箇所に線を引き、「ちょうになって仲間のもとに戻った。」と書き込んでいる。また、その根拠として、「声が聞こえてきました。」「客席の女の子が後ろから乗り出してせかせか言いました。」に線を引いて挙げ、「男の子がぼうしをあけるときを見たくなかった。」と書き込んでいる。「ちょう」の立場にたってその出来事や心情を説明しており、作中人物「ちょう」に寄り添ってその心情を読むというストラテジーがとられている。

しかし、実際の授業を見ると、ほとんどの場合、学習の流れの中心は、「松井さん」の物語として読むところにあることが多い。これは一つには、「白いぼうし」は、『車のいろは空のいろ』としてまとまっている一連の松井さんの物語の中に位置づけられる作品であるということがある。そしてもう一つには、この物語の主題を「松井さんのやさしさ」に位置づけるという読みが先行して存在するということがある。

だから、「女の子」「ちょう」の物語としてこの物語を読む学習者の読みを学習の中で生かすということはなかなかなされないのが実態である。だが、語りの面から見ると、この物語は、①作中人物「松井さん」に寄り添って読む　②作中人物「女の子」「ちょう」に

---

*1　授業は、2007 年 7 月 13 日（金）３時限に、上越市立大町小学校４年１組で田中枝利子教諭によって行われた。「ファンタジー作品を楽しもう！」という６時間読書単元の第３時である。
書式については、松本修『文学の読みと交流のナラトロジー』(2006) 東洋館　pp.83-84　参照

寄り添って読む　③語り手に寄り添って読む　という三様の読みが可能である。その語りの構造を分析し、読みの学習の可能性を考えてみたい。

1　「白いぼうし」の語り手

「白いぼうし」の語り手は、次のような特徴を持っている。

①　作中人物を「お客のしんし」「松井さん」「もんしろちょう」「女の子」「男の子」「おかあさん」「白いちょう」と全て三人称（しかも代名詞を用いず、きわめてニュートラルな三人称）で呼ぶ。（ただし「お客」という呼称は松井さん側からのニュアンスがある）

②　物語世界には語り手は登場せず、人格的な情報がない、超越的な語り手である。

③　せりふや松井さんの心中思惟は、「　」ないし（　）でくくられており、作中人物と完全に同化することはない。

④　知覚の基点は、ほぼ松井さんないし松井さんの近傍に置かれている。（詳しくは描出表現の分析を参照）

こうした特徴から見て、この語り手は、いわゆる「三人称の超越的な語り手」であるが、知覚はほぼ松井さんに寄り添っている、という構造を持っている。読み手は、語り手、作中人物のどちらに寄り添っても読みを進めることができる。

2　「白いぼうし」の描出表現

ここでは、学校図書の教科書掲載形をテクストとして使用して、語りの分析を行う。[*1] 特に、描出表現とみなされる表現の分析を行う。[*2]

「白いぼうし」における描出表現は、主として行動主体・認識主体としての人物主語の明示されない文に現れる。そのバリエーションを確認する。

a ほりばたで乗せたお客のしんしが、話しかけてきました。

「話しかけてきました」という表現は聴覚にかかわる表現であるため、誰が聞いたのかが問題になる。しかも、「きました」という方向性を持つ表現であるため、松井さん側に知覚の基点があるように見える。また、「お客」という丁寧表現が、松井さん側からのニュアンスを持っている。このため、この表現を松井さんの知覚の表現であると読むことも、知覚の基点を松井さんの近傍におきながら、語り手による説明がなされた表現であると読むことも可能になる。読み手によって判断が分かれる。逆に言えば、読み手がどちらの立場から物語を読んでいるかが明らかになる。

このような表現は他にもたくさん見られる。

b その大通りを曲がって、細いうら通りに入ったところで、しんしはおりていきました。

「曲がる」「入る」という運転にかかわる主体が松井さんと想定されること、a と同様、

---

*1　学校図書『みんなと学ぶ　国語　上』平成 17 年度版

*2　描出表現の定義は次による。

　描出表現は、「と」などによる明示的な引用の標識が欠けているか、その作用範囲のそとで、コミュニケーションの参加者と区別されるテクストの任意の参加者の発話や思考の内容を対象とし、コミュニケーションの参加者のたちばからテクストの参加者をさししめすモードで表現する類型である。

野村眞木夫（2000）『日本語のテクスト』ひつじ書房　p.251

「おりていきました」という表現に方向性があるため、松井さんの知覚の表現として読むことも、語り手による説明の表現として読むことも可能である。

また、非タ系列の文末を持つ表現に描出表現の特徴が見られる表現がある。

c 今日は、六月の初め。

夏がいきなり始まったような暑い日です。

d 緑がゆれているやなぎの下に、かわいい白いぼうしがちょこんとおいてあります。

e もんしろちょうです。

f ぼうしのうらに、赤いししゅう糸で小さくぬい取りがしてあります。

タ系列の文末表現と非タ系列の文末表現が交代で用いられている。こうした場合、非タ系列の文末表現の方が読み手にとっては現前性が高く、物語世界がより直接的に描かれているように読めることが多い。たとえば、c のような表現は、言いさしのような表現を含んでおり、語り手による表現とみた場合には、親しげな形で語り手の存在がやや強く感じられることになるし、松井さんの心中思惟とみた場合には、(　) による松井さんの心中思惟の引用の明示というシステムの外に、自由直接表現としての心中思惟の提示があるとみなすことになる。こうした部分の読みにも、読み手がどちらの立場から物語を読んでいるかが明らかになる。

女の子が後ろのシートに現れてからは、さらに別の可能性が生じている。

g つかれたような声でした。

この表現は、「道にまよったの。行っても行っても、四角いたて物ばかりだもん。」という女の子のせりふのあとにあるため、すでに見てきた描出表現と同様、語り手か松井さんか、どちらかの立場から読み手は読むことができる。しかし、次のような表現は少し事情が異なる。

h エンジンをかけた時、遠くから元気そうな男の子の声が近づいてきました。

i 水色の新しい虫取りあみをかかえた男の子が、エプロンを着けたままのお母さんの手を、ぐいぐい引っぱっていきます。

j やなぎのなみ木が、みるみる後ろに流れていきます。

このとき、タクシーの後席には女の子が座っている。「つかれたような声でした。」という表現によって、さらに、i と j の間にある「客席の女の子が、後ろから乗り出して、せかせかと言いました。」という表現によって、女の子に関心を寄せ、ちょうの化身としての可能性を感じ始めている読み手は、この三つの表現を、語り手の説明でもなく、松井さんの知覚でもなく、女の子の知覚としてみる可能性がある。

最初に見た学習者ＹＯとＭＡは、いずれもここにかかわる表現に言及しており、この三つの表現を誰の立場からの表現か尋ねたとしたら[*1]、「女の子」と答える可能性があるわけである。

このように、「白いぼうし」の語りは、多くの描出表現を含んでいるため、読み手の立場によって様々な読みが可能になる仕組みになっている。実際の読みの学習では、少なくとも三つの読みの立場が交錯する可能性があるわけである。

3　主題をめぐる議論

このような「白いぼうし」の語りの特徴は、主題の読みにも影響し、いくつかの対立的

---

*1　具体的には、「誰の声が（で）聞こえるか」というような聞き方をするとわかりやすい。

な主題を読むことが可能になる。すでに行われている主題論においても、そのような議論がなされている。

田川文芸研（1985）[*1] に代表される「松井さんのやさしさ」を作品の主題とする読みを踏まえ、鶴谷憲三（2001）は、次のように述べている。[*2]

『白いぼうし』はあまりにも「松井さんのやさしさだけが強調されるきらいがある。」と疑念を提出し、「女の子は、失われていく自然の象徴」と捉え、単にやさしさのみならず「自然へのやさしい思い」「自然の喪失」にこそ主題を読みとるべきとするのは藤原和好氏である。管見に入ったこれらの言及は、ニュアンスこそ違え、『白いぼうし』の主人公は松井さんであり、主題も松井さんの人柄や自然への「やさしさ」に求めていると言っていい。

これに対し、話型からいって「主役はあくまでチョウであって、これはチョウ＝女の子が無事に帰還する物語」と説き、『白いぼうし』の文学性にまで踏み込んだ論に、亀岡泰子氏の「あまんきみこ『白いぼうし』論―読者論の観点から―」がある。[*3]

鶴谷が引用している主要部分は次のようなものである。

…松井さんが端役に後退することで、〈チョウの脱出と帰還〉という話型がもともと可能性として持っていた副次的な人物たちや物語がほとんど削ぎ落とされ、〈脱出して帰還するチョウ〉それ自体が単独のイメージとして輝くからであり、またそれを容認する―狂言回しとして見つめていく―ことで松井さんは、自身の「やさしさ」というキャラクターに実質的な内容を与えることができるからである。

ジャンル論から主題を論じているものであり、「チョウの脱出と帰還の物語」として読む根拠がそれほど明確なわけではないし、結果的に作中人物の松井さんの性格に「やさしさ」を見ているという点でも、従来の読みとそれほど相違しているわけではない。しかし、既にみた学習者の読みと同様、「チョウが仲間のもとへ帰る物語」というミニマル・ストーリーに帰せられるような読みが提示されている。

鶴谷も指摘しているように、松井さんは、郷里から送られた夏みかんを車に置いてにおいを楽しんだり、逃げてしまった帽子の中のチョウの代わりに夏みかんを置いたりするような童心（茶目っ気）を持った、しかも現実と非現実の「蝶番」の役割を果たす境界的人物である。これも鶴谷も指摘しているように、タクシー運転手という存在は、見知らぬものを迎えては運ぶ境界的な空間の住人である。そのような松井さんが、囚われとなったチョウを偶然にしかし必然的に助けるというのが、物語の枠組みであろう。そこで松井さんがどのような性格かということはもともと重要なことではない。「やさしい」と言えばやさしいかもしれないが、別にそんなことはどうでもいいのである。

---

*1　田川文芸研（1985）『文芸教材研究ハンドブック―7　あまんきみこ＝白いぼうし』明治図書

*2　鶴谷憲三（2001）「におい・意味の変容―『白いぼうし』論」　田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力　小学校編４年』教育出版

*3　亀岡泰子（1994）「あまんきみこ『白いぼうし』論―読者論の観点から―」『岐阜大学カリキュラム開発研究報告』vol.14 No.3

「白いぼうし」の主題を「松井さんのやさしさ」とする読みは、細部の表現に着目しながら、それを解釈する解釈の仕方そのものがステレオタイプなものとなっている印象がある。これは、落ちやすいところに落とそうとする教室的な読みの形である。

学習の過程で、しばしば学習者から、「松井さんはなぜたけお君にあやまらないのか」という反応があると聞く。これは松井さんがやさしいとすれば、当然そうあるべきだという点で、「やさしさ」に主題を見る読みへの反論である。主題に重心を置き、しかも松井さんのやさしさに主題を見るような読みでは、実は読み手それぞれのこのテクストへのかかわりを明らかにすることはできない。

「松井さんがチョウを助ける物語」として読む読み手と、「チョウが仲間のもとへ帰る物語」として読む読み手、「松井さんが不思議な出来事に出会う物語」として読む読み手との間には、テクストの読みにおいて、着目する重要な表現に違いがあり、語りにかかわる部分テクストの解釈が違う。このことを前景化するとき、今や新しい指導要領上の重要課題ともなった読みの交流が可能になる。むしろ、その中では、物語の読みのストラテジーそのものが問題となるはずである。

そのような学習においては、「やなぎのなみ木が、みるみる後ろに流れていきます。」という部分テクストに女の子の声を聞く読み手が、初めて一つの読みの可能性を認められることになる。松井さんがどのような人かという問題や、出来事についてどう考えるかというような問題は、互いの読みの違いがわかった上で初めて可能な、自由なやりとりとでも言うべきものだろう。

4　末尾のバリアント

「白いぼうし」の最後の一文は次のようなものである。

車の中には、まだかすかに、夏みかんのにおいが残っています。

語りに関わって互いの読みの違いを意識化するには、この部分が誰の声で聞こえるかというような問いを作るのも一つであろう。作中人物に寄り添うのか、語り手に寄り添うのか、という違いはわかる。

ところが、講談社文庫版（ポプラ社版も同じ）では次のようになっている。

空色の車の中には、まだかすかに、夏みかんのにおいが残っています。

「空色の」が加わったことで、語り手の声だとする読みが優勢になると思われる。山本茂喜（1992）にあるように、他の部分も「びわの実学校」版の方が末尾の現実世界としての性格が強い。[*1] 教科書掲載形は、より、非現実に近い、しかも物語内容に即した作中人物に寄り添った形になっている。この物語は、その生成過程においても、揺れを持ったも

---

*1　山本茂喜（1992）「「白いぼうし」試論―あいまいさの構造―」『日本語と日本文学』第 16 号 筑波大学国語国文学会　1992.2.　pp.1-8

あまんきみこ『車のいろは空のいろ』「白いぼうし」pp.20-24　1978　講談社文庫

あまんきみこ「白いぼうし」『びわの実学校』24 号　1967.8

あまんきみこ『車のいろは空のいろ』ポプラ社　1968

のとしてあるのであり、読み手がその幅の中で多様な読みを展開するのはある意味当然である。そしてこれはファンタジーには必然でもある。非現実をどの程度、どこから非現実とみなすのかは読み手に委ねられているからだ。

このようなテクストを読む場合には、その読み方の違いを問題にし、自分の読みを見直すことによって、自分にとっての「白いぼうし」の意味が他者との間でどう位置づけられるのかを考えていくことに意味がある。一つの主題に収斂するような学習は、テクストの可能性を限定し、個々の読み手の読みを切り捨てる可能性がある。

山本は次のように述べている。

> 今日、教室で支配的な松井さんの「やさしさ」に傾斜した読み―松井さんは蝶の喜びに共感できるほどやさしい人だ、というような―は、（中略）白いぼうしの蝶と女の子と野原の蝶・蝶の声を、物語の因果律の中で、つまり、松井さんの心の中で結びつけるところに成り立つ読みである。これは、この作品の曖昧さを無視した読みの一つにすぎず、しかも、この作品の微妙な感覚、眩暈のような感覚からは遠い読みと言わざるをえない。

語りに着目し、互いの読みの違いをその理由も含めて理解しようとすれば、一つの物語構造に対応した一つの主題を求めるような学習過程にはならない。「白いぼうし」の語りは、この物語が持つ豊かな読みの可能性、学習の可能性を提供しているのではないか。

付記：本論は 2008 年度上越教育大学教職大学院における「臨床共通科目２教科等の実践的な指導方法の実践と課題」のグループ別研究課題「「語り」の分析による教材研究の意義と方法」のグループ検討発表をもとに書かれたものである。グループのメンバーである佐藤多佳子・田中治朗・加藤岳宏・遠藤まり・金子祥一・渡久地未佳の各氏に感謝したい。